1. ようこそ！ブックワールドへ

各務原市立稲羽西小学校
６年　岩井 佳子　　奥村 里穂　　清水 麻緒
岩井 友美
↓
敦賀市立敦賀西小学校
６年　丸山 雄一

夢は、本が大好きな元気な子です。今日も図書館にやって来ました。
「わあ、この本おもしろそう」
本の題名は、『ブックワールド』です。夢は、この本を借りることにしました。
「この本、借ります」
「では、二週間以内に返却して下さい」
「分かりました」
家に帰ってさっそく本を読もうとしましたが、本が開きません。
「あれ、開かないよ。何でだろう？」
見るとかぎ穴があります。
「えっ、何これ？　……かぎ穴。だから開かないのかな？」
「フフ……。あたり前でしょ。だって、私が閉めているんだもんネー」
「えっ、だれ？　どこにいるの？」
「フフンーだ。だれだろねー」
突然、パカッと本が開きました。そして、風もないのにページが勝手にめくれて、真ん中で止まりました。
「へへーんだ。これは、実際に楽しめる本なんだ。早く入ってよねー。早く入らないと私が困るんだからね！！」
見ると、本の上にかぎがのっています。そのかぎは、ネックレスのように首にかけられるようになっていました。夢はそのかぎでとびらを開けました。
すると……！？　ネックレスが夢の首にかかり、夢は本の中に吸い込まれて行きました。
「ワァ、ここどこ？」
「ここは、本の中」
「えェーッ」
夢は、頭の中が真っ白になりました。
手の平ぐらいの大きさの物が目に入ったので、夢はそれをガシッとつかみました。
「うわー、何これ？　人形？」
「人形じゃないやい！　ようせいだい！　しかも、うわーって何よ！　こんなにかわいいカプリなのに！」
「……」

「なっ、何よ。何なのよ！」
「へえ、カプリっていうんだー」
　夢はにやにやしながら言いました。カプリはあわてて、
「べ、べ、べつに、あんたのために教えたんじゃないんだからね！　別にそういうのじゃないんだからね！　ようせいなんて、そこらにいるし、普通なんだからね」
　と言いました。夢は少し、ポカーン……という顔になってしまいました。そして、
「えーー、こっちは本の世界と違って、ようせいとか言っているとヘンな目で見られるよー」
　すると、カプリの顔が真っ赤になってしまいました。
「もう、そんなのいいから。とにかく、女王様の所に行かないとこっちの世界で消えちゃうんだからね」
「えっ？　消える？」
「そう、消えるの！　こっちの世界じゃ、人は一日ぐらいしか持たないしね。つまり、そっちの世界ではすごく楽で、運動神経バツグン！　ていうことになるんだからね」
「へェ、そうなの。で、早く女王様の所に行かなきゃ。どこにあるの？」
「もう、あの西にある、水晶のとうにいるの！　あと、とりあえずこれ付けて！」
　と言って、カプリは夢に羽根を渡しました。
「それを背中に付けてよね！」
「え、う、うん」
　夢は言われた通りに羽根を背中に付けました。すると、夢は鳥のようにふわふわと浮きました。
「この羽根は、自分の思い通りに動かすことができるの。初心者のあなた向けね」
　夢がほおをふくらませて、怒った顔を見せると、カプリは夢のほおを押しました。
「何するの」
「いいから早く！」
　外は、ちょっと暗くなっていました。ヒュォーと風が鳴りました。
　バサッと大きな音を立てて、二人は西へ羽ばたきました。夢は宇宙でよろめきました。
　するとカプリは、
「何やってんの！　ちゃんと飛びなさいよ。私が困るんだから！」
「……ハイハイ。分かりましたよー」
　夢は、宇宙を見上げました。
　日本時間でいう六時四十五分頃になったようです。
「あっ、帰らなきゃ！」
「えっ、もーお？　帰らなくていいのに……。べ、べつにさみしくなんかないんだからね！」
「えっ、でも、帰らなきゃ。今日の夕飯は、私の大好きなからあげなんだからね」
「……大変！　本が閉じてる！　あんた、帰れないわよ！！」
「えっ、どうしよう……。女王様にたのんでよー！！」
「無理よ！　あんたの親が本を開いてくれるか、風で開かないと……」
「うそーー、私、帰ること出来ないの！？」　★

「こうなったら、カプリ。ダメもとでたのんでよ。お願い！」
「しかたない。たのんでみるわよ……」
「じゃ、女王様のいるお城へ行ってみよう」
　その時です。急に真っ白なきりが辺りをおおいました。
「すごいきりね……。さあ、時間がないから早く行こう。どっちに向かえばいいの？」
「分からないよー。水晶のとうが見えなくなっちゃった！」
「えー！」
　大変です。水晶のとうの場所が分からないと何もできません。夢とカプリは女王様の元へたどりつけるでしょうか。
「とにかく光のある方へ向かおう」
　当てもなく飛んでいたら町があったので、町に降りました。
「ねえ、カプリ」
「なに？」
「ここで水晶のとうがどこにあるか、聞いてみようよ」
「それはいい考えね」
　夢とカプリは近くのお店の人に聞いてみました。
「ん？　何だおまえら」
「ねえおじさん。水晶のとうがどこにあるか知ってる？」
「ん？　水晶のとう……。ああブック城のことか」
「ブック城？」
「ああ。ブック城ならあの光の方へずっと行けばあるぜ」
「ありがとう、おじさん」
「じゃあ、お城目指して出発だ！」
「ちょっと待って。私が借りたこの本にそっくりの本が売られてるの」
　それはまぎれもなく、夢の借りた本でした。そこには何か、地図の様なものが書いてありました。夢は、その本を買いました。
「なぜか分からないけど、行こう」
「そうね」
　二人は急いでお城へと向かいました。
「ねえカプリ。お城が見えてきたね」
「そうね」
「あそこに降りよう」
　夢とカプリはお城に着くと、急いで女王様のところに行きました。
「女王様！」
「女王様、私を元の世界へ戻すことはできませんか？」
「あなたの言いたいことは全て分かっています。あなたが持っている本と本を合わせれば、できないことはありません。しかし、もう片方は……モンスターが住みついている地下にあるのです」
「なんですってー！」
　大変です。地下に本の片割れがあるというのに、モンスターが住みついてしまってい

るのです。
「でも、帰れないのはいやだから、勇気を出して行こう」
　夢がおそるおそる入って行くと、いきなりモンスターがブックイズを出してきました。
「『ふしぎのかぎばあさん』に出てくる主人公のぼうしには、何のアルファベットが書いてある？　答えられるか？」
「夢、答え分かる？」
「答えはKよ」
「な、な、な、何で分かった？」
「昔、お父さんが買ってきてくれた本だから」
「本がほしいのなら、ここにある」
　モンスターはしっぽで本の場所を指しました。
　本がそろったとき、モンスターが光り出しました。その光の中から、夢のお父さんが現れました。七年前に消えたはずのお父さんが現れたのです。
「お父さん！！」
「夢！！」
　お父さんと夢は再会しました。
　お父さんと夢とカプリは女王様のところへ行って、聖域への道を教えてもらいました。
　そして、聖域を目指すことにしました。
「夢」
　女王様が呼び止めました。
「あそこは危険だから気を付けなさい」
「はい」
　夢とカプリとお父さんは聖域へ向かいました。
　その途中に、いばらの迷路がありました。
「どうしよう。道に迷った」
「そうだ！　羽根があるのを忘れてた」
　みんなで飛んでいたら、いばらがおそってきました。夢はとっさに本をいばらに向けました。するとまた、光が差しました。そのとたん、いばらはとけてしまいました。そして夢たちは、聖域に入ることができました。
　夢とお父さんは真ん中に立ちました。
「カプリ、さようなら。元気でね」
「バイバイ、夢」
　突然本が光り出して、時間が吸い出されました。夢とお父さんの姿は消え、夢たちは現実の世界に戻りました。
「ただいま！」
　二人が帰ってきた部屋には、からあげのいいにおいがしていました。